

麗澤に学んで



平成 27 年度
麗澤高等学校

麗澤高校の道德教育

麗澤高等学校では、毎朝のショートホームルームにおいて、教室に掲げた『心のカレンダー』（本校の教育理念の根幹である「モラロジー」の内容を、カレンダー形式に31の格言にまとめたもの。公益財団法人モラロジー研究所刊）を生徒が読み上げることから一日がスタートし、週に1時間全クラスで道德の授業を行っています。この授業は本校の人間教育の大きな柱をなし、クラス担任が中心となって進めています。授業は、テキストである『最高道德の格言』（本校の創立者である法学博士廣池千九郎がまとめた格言集。公益財団法人モラロジー研究所刊）に掲載されている格言についての生徒による研究発表から始まります。これに続いて、「モラロジー」を土台として「感謝の心、思いやりの心、自立の心」を育むことを念頭に、教師がそれぞれの知識や経験に基づいて授業を展開します。

ここでは、平成27年度の高校3年生（6年生）が、道德の授業で発表した内容と「高校生活を振り返って」という題でまとめた作文の中から一部選んで掲載いたしました。道德の授業だけでなく、部活動や生徒会活動、寮生活や研修旅行などを通じて学んだ成果が表現されています。

言葉（道徳の授業の発表）

6年B組 堀内 晴加

麗澤高校に通い始めて三年目になる今になって思うことは、高校に入るまでの自分よりも、今の自分がポジティブになったということです。その原因の一つは「言葉」が大きく関係していると思います。

中学生までは、道徳というと、ただ教科書を読んで、自分の意見を紙に書くくらいのことしかしていませんでした。しかし麗澤高校では、毎朝「格言」を聴き、更に道徳の授業ではクラスみんなの格言に対する見解や意見を聴くうちに、今までほとんど考えて来なかった「言葉」そのものが持つ意味について深く考えるようになったのです。そうしているうちに、その言葉が本来の意味かどうかはわかりませんが、自分なりに「こういう意味なのかな」とか「そういうことが実行できたら、もっとうまくいくだろうな」などと考えるようになり、前向きな言葉としてとらえ、それが自然に自分への励ましや、戒めの言葉となり、たとえ嫌なことがあっても、少しずつ良い方向に考えられるようになってきました。またある本の中に「言葉が人を幸せにする」というようなことが書かれており、自分が発した言葉が自分自身を左右するようになるとありました。だから嫌なことや辛いことがあっても、せめて言葉だけは、いつも前向きであることが大切だと気づくようになりました。

最後に、これからの人生、楽しいことや、嬉しいことばかりではないと思います。むしろ苦しいことや辛いことの方が多いかもしれません。しかし私は「その時苦しく大変だと思ったことほど、後になって大きく素晴らしい思い出になる」という私の心に深く残った「言葉」を思い出しながら、これからの人生を歩んでいきたいと思っています。

道徳の発表

6年C組 縄田 友佳

私は、誰も見ていないところで努力できる人は本当に素晴らしい人だと思います。また人の嫌がるような仕事や行動をできる人も素晴らしい人だと思います。

ある日、部活動の練習で体育館のトイレを使用した時、入口のサンダルがきれいに並べてあるのを見つけました。その少し前に掃除をするためにトイレで雑巾を絞った時は、確かにサンダルは散乱していたので、おそらく女子バスケットボール部の部員の誰かが、並べてくれたのだと思います。私はとても感動しましたが、同時になぜその時私が自分で直さなかったのだろうと反省する気持ちが湧いてきました。この時以後、私は気づいたらサンダルを揃えるように心がけています。今でも誰が揃えてくれたのかわかりませんが、同じ女子バスケットボール部にそういう人がいるのだと思うと、本当にうれしい気持ちになりました。

サンダルを揃えるだけではなく、落ちているゴミを何も言わずに拾ったり、授業の後の黒板を率先して消したり、汚れた場所をさりげなくきれいにしたり、周りの人のために私たちにできる

ことはたくさんあると思います。そのようなことが、自然に、そして率先してできるように努めていきたいと思います。

高校3年になり、新しく後輩が増えたので、今まで以上に後輩たちの模範となり、彼らがまねをしてくれるような行動ができるように心がけていきたいと思います。率先垂範とは、自分の意識次第でできることだと思います。だからこれからは、人の嫌がるような行動も率先してできる人を目指していきたいと思います。

他人の欠点を見て、自分を見直す

6年E組 河村 由貴

私は、他人のできていないことや、欠点を知った時に、すぐ相手に注意をするのではなく、一度自分自身の行動を振り返ってみるべきだと思います。人間は、相手の中に嫌な部分を見つけたら、それは無意識に自分がやっていることであり、自分の嫌な部分を反映したものだ、と聞いたことがあります。つまりあの人のここが嫌いだということは、自分が無意識にしている嫌な行動なのだということです。しかし私自身は、自分はそんなことなど決してしないと思って生きてきたので、初めてこの言葉を聞いた時、深く考えさせられ、本当かどうかはともかく、一度見直してみようと思いました。自分の嫌なところを知り、それを直して行けたならば、周囲からの信頼は厚くなっていくでしょう。しかしそうではなく、例えばだらしのない相手に、親切心からであってもそのことを指摘したならば、当の相手だけでなく、周囲の人は、私に対して、自分もできていないのによくそんなことが言えるなあと、まったく説得力もなく、ただ聞き流すだけだと思います。私は、安易に注意することは、まったく無意味であると感じました。一番大切なことは、そういう時は、まず自分に当てはめて考え、相手の立場になって物事を見つめることだと思います。自分のできていない所としっかり向き合っていく必要があります。これからは、今回発表させていただいたことを心に留め、自分のことだけで精一杯になって他人に非をぶつけてしまうのではなく、しっかりと己と向き合えるようになりたいと思います。

高校生活を振り返って

6年A組 森野 真未

私にとっての高校生活の三年間は、とても密度の濃いものでした。部活（剣道部）では、朝練も午後練も特別な用事がない限り参加し、大変なことや辛いことがたくさんありましたが、今振り返ってみると本当に貴重な経験でした。この三年間、特に部活で中心的な役割になった5年生の頃からずっと考えていたことは、「続ける」ということの難しさでした。4年生の頃は、上級生についていくだけでよかったので、そこまで悩むことはありませんでした。しかし最上級生となり、後輩からの視線を感じつつ、先輩方が築き上げてこられた伝統を壊さないように、模範となるようにふるまうことは、本当に難しいことだと実感しました。確かにTKコースに所属しつつ、部活もバリバリやって、プロジェクト叡智の講座も始まってからの生活は、本当に苦しかったです。しかしそこを辛抱して、乗り越えた先に、部活では、初の男女アベックでの団体県大会出場を決めることができました。また勉強面でも、必要最低限のことしかできませんでしたが、課題の提出期限を守る、定期テストで結果を出すという、受験勉強にとっては基本的なことを定着させることができたように思います。まだこれからも受験勉強が続きます。これからもっと苦しいことや辛いことが起こってくるでしょう。でもそんな時こそ部活で培った忍耐力や、コンスタントに継続させる力を活かして、大学生になってからも、社会人になってからも、国際社会やまた自分の置かれたコミュニティにおいてしっかりと対応でき、信頼される大人になっていきたいと思います。三年間楽しく充実した高校生活を送らせていただき、ありがとうございます。麗澤に入学することができて本当によかったと思います。

高校生活を振り返って

6年B組 菅野 拓弥

私は、中高6年間、麗澤で過ごしました。中でも高校3年間は、大変密度の濃い時間を過ごすことができました。私は、この3年間、麗澤の先生方の優しさと温かさを強く感じていました。受験生になり、将来の進路で悩んでいた時に共に悩んで下さり、また補習や面談のために大切な時間を割いて下さり本当に感謝しています。このご恩は将来私が人のため役立つことでお返ししたいと思います。また私は在学中、友達や先輩・後輩など、いろいろな人とのつながりの大切さを強く感じることができました。自分が思い悩んでいる時に、相談できる仲間がいること、また社会に出てから困らないように目上を敬う態度を教えて下さった先輩方、私に自分で考え行動し、周りへの気配りをする力を身につけてくれた後輩たち。これらたくさんの人とのつながりを体験させてもらうことができ、おかげで私自身成長することができたように思います。この体験を生かし、10年後、20年後も、自分を常に成長させてくれる人脈を形成できるよう励んでいきたいと思います。

さらに私はこの学校で、将来の夢を見つけることができました。長く私は将来なりたいものが見つからず困っていましたが、こういう私に小学校教師という夢を持たせてくれたのはこの麗澤でした。「将来を担う子どもたちを自分が手助けし、導いていきたい」そう思えるようになったのも、学ぶ機会を与えて下さった先生方や、支えてくれた仲間たちのおかげでした。もちろん後悔することや、やり残したことはたくさんありますが、このように勉学だけでなく、人としての成長する機会を与えてくれた麗澤に感謝したいと思います。

高校生活を終えて

6年D組 松浦 健

気がつけば高校3年間はあっという間に終わってしまいました。この3年間を振り返ってみると、部活や勉強や友人関係など様々なことがありましたが、一番思い出深いのは、寮生活でした。

私は中学からの一貫生で、3年前の私は寮に入る気持ちなど全くなく、入寮を勧める母親とは対立していました。結局嫌々入寮することになってしまいました。入寮当初は、家から離れて暮らすことや、恐い先輩がいるのだろうかなどと不安の気持ちでいっぱいでした。しかし、いざ入寮してみると、新しい友だちもでき、上級生の方たちとも親しくすることができ、当初の不安は徐々になくなっていきました。とはいえ4年生の1学期は、寮の仕事を覚えたり、上級生との上下関係で苦労したりすることなどたくさんあり、とても大変でした。しかし今振り返ってみると、その苦労した時期があったからこそ、今の自分があるのだと思います。そして今度は6年生になってからは、私は4寮の副寮長に選ばれました。選出された時、威厳はなく、話も上手ではない自分が副寮長などになってよいのだろうかとずいぶん悩んだことを覚えています。そうやって始まった1年間の副寮長生活でしたが、特に大きな問題もなく無事務めを終えることができそうです。これが可能になった一番の原因は、仲間に恵まれたことだと思います。3年間、楽しい時も大変な時も、どんな時も友達がいてくれました。いつも自分を助けてくれた友達には本当に感謝しています。それに加えて、尊敬に値する友達もできました。彼は他の寮の寮長で、勉強も寮生活も真剣に取り組む人でした。その彼がいつも頑張っている姿を見ると、自分も頑張ろうという気持ちになれました。

私は、このように私を支えてくれた友達だけでなく、指導して下さった先生方、またいつも応援してくれた両親、これらの人たちに心から感謝したいと思います。これからもこの感謝の気持ちを忘れることなく、頑張っていきたいと思います。

高校生活を振り返って

6年E組 大川めぐみ

この三年間は今までで一番将来を考えながら過ごしてきたと思います。

私は中学生の時から小学校教諭になるという夢をぼんやりと描いていました。麗澤高校での三年間は、そのような夢を持って生活してきた私にとってとても充実した高校生活でした。

学習面では、中学よりも圧倒的に勉強内容が濃く、部活や習い事の両立が難しかったです。ですから、限られた時間でどのように効率よく勉強するかを計画する大切さを学びました。四年生の時から模試を経験することができ、早くから大学を考える機会を与えて下さった先生方に感謝しています。また、中学生の時の私にとっての友達は、一緒にいて楽しいという関係でしたが、高校生になると時には楽しく、時には励ましあい、時には真剣に相談に乗る、乗ってもらおうという関係になり、たくさんの面で、充実したと思います。特に学校行事の体育祭では、五・六年生の時応援団に入りました。五年生の時は、最初入るか迷っていましたが、しかし、実際に入ってみると、部活の先輩を始め、多くの先輩方と出会いたくさんの事を教えていただき、とても楽しかったです。今まで先輩と関われるような環境に身を置いたことが少なかったのが新鮮でした。最後の体育祭では真剣だからこそ起こる衝突などもありましたが、同じ目標をもって一致団結することが楽しくて、一生の思い出になりました。文化祭では、三年間連続で屋外での出展だったので、毎年雨が降らないように祈っていました。そのおかげか、毎年天候に恵まれ、気持ちよく文化祭を楽しむことができました。特に最後の文化祭では、副会長として会長を支える存在でいなくてはならないと考えていましたが、急にすべてを要領よくやることはできず、クラス皆の手を借り、会長にも頼りきりでした。リーダーという役割の重大さや大変さを痛感しながらの準備期間でした。しかし、支えてくれるみんながいてこそこのリーダーであるということも同時に学びました。当日は初めての食品販売に悪戦苦闘でしたが、無事に終えました。光のように早い一日で、また算会の中で一番濃い文化祭だったと思います。会長をはじめ、装飾係の人やクラスのみんなに感謝しています。

この三年間で勉強や人間関係などたくさんの事を学びましたが、その中でも道德の授業が強く印象に残っています。道德の授業は毎回異なる先生が授業をしてくださいました。人間関係についてや、日々感謝すること、生きていくうえで大切なこと、命の尊さなど、当たり前のことですが、自分を見つめなおす機会になり、将来に向けての財産となりました。先生方にとっても感謝しています。

この三年間で一番学んだ事は、「感謝」です。こうして私が毎日幸せに暮らしていけるのは親のおかげであり、熱心にたくさんの事を教えて下さる先生方や高校生活を共に過ごしてきた友人にも感謝を尽くせません。私は「生きている」のではなく、「生かされている」ということを忘れずに、これからも生きていきたいです。

高校生活を振り返って

6年E組 白取 かや乃

私の高校生活は部活抜きに語ることはできません。私は吹奏楽部に所属していました。ほとんど毎日練習があり、私服を着ることなど滅多にありませんでしたが、遊んでいる他の高校生を見ても、不思議と羨ましく思ったことはありませんでした。それは、部活において他では経験できない充実感を常に味わっていたからだと思います。

1年目の夏は、私にとっては大きな試練でした。それはコンクール曲のソロの一つを任せられることになったからで、まだ4年生だった私にとっては、大きなプレッシャーだったからです。先輩方のためにも、私が足を引っ張ることなど絶対にできないと思っていました。大会前の合宿では、夜の自主練をしていたら、いつの間にか私一人になっていて、更に日付が変わっていたなどということもありました。しかしこの1年目の経験で、私は大きく成長させていただき、これがとてもいい経験になりました。

部活での最も大きな思い出は、3年目の最後の大会でした。吹奏楽部は、他の部活と比べても一番引退時期が遅く、受験勉強との両立が本当に大変でした。また今年からはプロジェクト叡智も始まり、周りの友だちが熱心に勉強している中で、自分だけが取り残された焦りも感じていました。夏休み前、部活の6年生で、何度もミーティングを行い、どこまでプロジェクトの講義を優先させるか、またどうしたら悔いなく部活をやり切ることができるのかを話し合いました。みんなとても部活に対して強い思いを持っているのだと思います。こうして臨んだ高校最後の大会は、千葉県で10位という今までで一番良い成績をいただくことができました。ここが千葉県でなければ、と思う時もありましたが、激戦区である千葉県だからこそ、感じる喜びはより大きなものとなりました。

このように、私は、吹奏楽部で大変充実した3年間を送らせていただくことができました。今思えば、人数が多いゆえに沢山ぶつかり合ったことや、大会前に泣きながら練習したこともありましたが、全ては良い思い出になっています。また大人数で一つの音楽をつくる吹奏楽部だからこそ学ぶことも多く、やり切った時の達成感や感動は一入でした。演奏会を一つ開くのにも、裏方の人や会場に聴きに來てくださる方が大勢いて、支えて下さる方々の多さには本当に驚きました。またスポンサー探しやポスター貼りのために、自分たちで行動することがあり、吹奏楽部でなければできない経験もさせていただきました。こうして私が3年間やってくることができたのも、先生方、仲間たち、先輩、後輩、親のおかげであり、学校内やその他の大勢の方々の支えがあったからです。特に、部活での仲間は、家族のように大切な存在です。本当に恵まれた幸せな3年間でした。ありがとうございました。

高校生活を振り返って

6年F組 中野 佳樹

私は、高校3年間でたくさんのことを学びました。私は高校3年間寮で過ごしました。そこでは、時間やルールの厳しさ、先輩、後輩との接し方などを学びました。朝、寒くて起きたくない日の朝礼、部活で疲れていても毎日出席しなければならない夕礼など、辛い中で耐えてやらなければいけないこともたくさんありました。また3年生の時に副寮長に任命され、自分から率先して行動することや、後輩など周りの仲間から見られているということを感じるようになりました。毎日、毎日、日常生活の中で、考えなければならぬところも本当に大変でした。しかし1年間続けた夕礼での所見発表は、大学受験の時の面接で本当に役に立ちました。そういう経験の中から、辛いことでもやり抜いてきたことが、今につながっているのだと思いました。

学校生活においては、4年生の時の谷川研修で廣池千九郎先生の思いや、どういう意志を持ってこの道徳を作られたのかを学びました。また5年生になると九州研修で鹿児島県の知覧を訪れ、特攻隊の人たちがどのような思いで特攻に飛び立ったのかを知ることができました。特攻隊の若者が書いた家族への手紙は今でも鮮明に心に残っています。6年生の時に、母を亡くし、人の死を経験することの辛さ、癌の恐ろしさと憎さ、そして何より自分が無力であるということを痛感させられました。だから自分が受験勉強で辛くなった時や、分からないことが出てきた時、父や母のことを思い出すことで、もっと頑張らなければ、誰がやるんだ、という気持ちがこみ上がってきました。

中学、高校と道徳というものを学び、周りの人への思いやりや、「やる」のではなく「やらせていただく」という気持ちで物事に取り組むことを学び、感銘を受けました。高校3年間は、辛いことだけでなく、楽しいことも本当にいろいろとありました。しかし社会に出ると、もっと辛いことや理不尽なことがたくさんあると聞いています。だから私は、高校3年間で学んだことを最大限に活かし、大学受験や社会における荒波に立ち向かって行きたいと思っています。そして道徳で学んだ「感謝の心」「思いやりの心」「やらせていただくという精神」を大切にしていきたいと思っています。

麗澤で学んだこと

6年G組 藤本 智子

私が6年間麗澤で過ごし、学んだこととは、道徳でした。毎朝心のカレンダーを開き、毎週道徳の授業を受け、また道徳を学んでいる先生方や仲間たちと関わる中で、自然と道徳的な考え方が身についていったと思います。実際私は、そう強く感じたことがありました。

私が4年生の1学期の時、体調を崩して入院したことがありました。高校生になって初めての中間試験を数日後に控えたころでしたので、私はなぜこんなことになってしまったのだろうと、はじめは中々納得できませんでした。しかし心のカレンダーの中の「自ら運命の責めを負うて感

謝す」という言葉を思い出してから、少し違ってきました。私は看護師を志していたので、これは自分のために与えられたもので、患者として医療の現場をみることができるようになる機会だと考えるようになりました。そう考えることで、悲観的な考えが少しずつなくなっていました。自分が患者として感じたことを大切に、将来多くの人を救いたいと思えるようになりました。5年生の時にも、入院することがありましたが、その時も私はこの格言を思い出し、大変な経験ではありましたが、どちらも私にとっては良い経験となり、看護師になるという思いがより強く、具体的になっていったように思います。

私がこのように考えることができたのは、道德教育が行われ、道德が実践されている「麗澤」という環境で過ごしたからに他ならないと思います。高校生活の中でも、道德で学んだことを思い出すことがよくありました。これから先、私が困難に遭遇した時、麗澤で学んだ道德は、私を救ってくれると思っています。そして多くの人と関わり合っていて生きていく中で、道德の役割はより大きな価値をもつことになるでしょう。私は、この「麗澤」という場所で6年間学ばせていただけたことに感謝し、今後も麗澤で学んだ道德を大切に、実行し続けたいと思います。

高校生活を振り返って

6年I組 浦田寛之

私にとって、この麗澤高校で一番の思い出は寮生活です。十八年間生きてきた中で、最も辛く、最も厳しく、最も勉強になり、何より最も楽しい時間でした。

二年前の四月、私は初めてこの学園に足を踏み入れ、麗寮に入寮しました。全てが初めて尽くしで不安でいっぱいだった私を迎えてくださったのは先輩方でした。ものすごく大きな声で挨拶をされ、言葉遣いや身のこなし方全てに礼儀正しさがあふれている先輩方を見て圧倒されていた私がありました。しかし、その先輩方の行動の中に心遣いや温かさがあることに気付き、二年後には私もこのような人間になりたいと心に決めたことを今でもはっきりと覚えています。

いざ寮での生活がスタートすると、自分の未熟さを痛感しました。今まで、父や母、家族を中心にどれだけ多くの人たちに支えられてきたのか。これが私にとって一つ目の大切な学びでした。四年の一学期には特にホームシックに悩まされ、毎日のように半泣きで両親に電話していました。どんなときでも両親は熱心に私の話に耳を傾けてくれて、たくさん声をかけてくれました。洗濯や掃除といった家事、あるいは朝早くから夜遅くまで働いてお金を稼いでくれること、もちろん、これらだけでも多くの点で両親に頼り助けてもらっています。しかし、私が一番助けられていたことは、いつでも当たり前のように父と母がそばにいてくれて、どんなにつまらない話でも一生懸命聞いてくれて、私が辛いときに自分のことのように一緒に苦しみながら助けてくれたことです。一緒に生きてくれることがどれだけありがたいことか感じました。高校卒業後、真っ先にしたいことは、こんな私の一番の理解者である大好きな両親に「ありがとう。」と感謝の気持ちを伝えることです。

次に寮生活を通じ学べたことは、道徳という、堅い気もするのですが、思いやりや礼儀といった心です。先輩方と過ごす中で、先輩方の周囲への気配りや行動に感動を覚えることが多々ありました。その理由を考えてみると、それらの行動すべてに心がともなっていることに気付きました。「心」と言葉で表すのは簡単でも当時の自分にとっては難しいことであり、何をすればいいのか分からず、先輩に怒られてばかりでした。それでも、多人数で共同生活をしていくうちに、自分がされて嬉しいことを周りにもすればいいし、自分がされて嫌なことは周りにもしてはいけないという至極当たり前のことに気付きました。それからは一つ一つの挨拶や先輩方への気配り、後輩への指導など全ての行動を心からすることができ、自分の生活も充実していきました。この思いやりや礼儀の心は寮生活を通さなければなかなか高校生のうちには得られないものだと思います。大学入学後も社会人になっても、このことを一番大切に、周りを幸せにし、何より自分も幸せになれるよう生きていこうと思います。

そして、麗寮での三年間で一番の宝物は同じ時期に同じ気持ちで入寮し、同じように苦しみ楽しみ、最後に同じ時期に旅立つ同級生の寮の仲間たちです。まず、彼らには「ありがとう。」と伝えたいです。間違いなくこの三年間、傷つけたり、迷惑をかけたしたりした仲間がたくさんいると思います。でも、そんな仲間がいなければ、この三年間を乗り切れませんでした。朝の打鐘の音から就寝の十二時（たまに翌日の鐘の音まで…）食事から入浴から何でも共に過ごした仲間を本当に誇りに思います。ふざけたことをして馬鹿笑いするのも一緒、その後こっぴどく怒られるのも一緒でした。ここには書くことができない様々なことも麗寮のバカだけどころく良い仲間がいなければ絶対にできないことでした。そんな仲間たちと、勉強、笑い、心の成長、色々なことで本気で真剣に切磋琢磨したからこそ最後の辛い受験勉強もこの麗寮でみんなとやり切りたいと思います。本気で死ぬまでこの仲間たちと楽しく、時に厳しく、まだまだ切磋琢磨していくつもりです。

最後に、ここまで書いてこの三年間麗寮で様々なことを学んできたのだと改めて気が付きました。この麗寮は人として生きていくうえで、絶対に欠かせない大切なことばかりを気付かせてくれる素晴らしい場所だと思います。この大切な宝物を胸にしまって、小さな麗寮から広い日本やその先の世界で死ぬまで後悔せずに、自分もみんなも誰もが幸せになれるよう感謝を忘れず最高の人生を突っ走っていきます。